



# 学校だより



## 8・9月号

令和4年(2022年)

8月29日(月)

横浜市立洋光台第二小学校

## 「ガラスのうさぎ」に込められた思い

学校長 高島 典子

長い夏休みも終わり、いよいよ学校が始まりました。この夏休みは、猛暑や局地的な大雨、コロナ禍の第7波など、我慢を強いられることもあったかと思いますが、気持ちを切り替えて元気にスタートしていきましょう。

さて、夏休み中に本屋をいつものように何気なく歩いていたところ、一冊の本に出会いました。タイトルは「ガラスのうさぎ」です。タイトルそのものに微かに記憶があったため、その棚を通り過ぎて気になって仕方なく、手に取って読むことにしました。この本は高木敏子さんの体験をもとに書かれた本で、第二次世界大戦の戦争体験をつづったものです。映画やテレビドラマ(NHK)にもなり、青少年読書感想文全国コンクールの課題図書にも選定されたものでした。太平洋戦争の中を生き抜いてきた一人の少女(終戦時小学校6年生)の物語です。

東京墨田区、両国国技館の近くで置物や時計の枠などガラス工芸品をつくる工場の一家の話。日々戦況が悪化する中、工場は軍の医療物品をつくる工場に替わり、父親は満州(現在は中国領)に技術指導者として派遣され、兄二人(高1と高2)は志願兵となり戦地へ行き、心臓の弱い母と幼い妹二人と一緒に東京に残った主人公の敏子さんは、妹(小1と小4)たちと一緒に集団疎開をしたり、母の代わりに特攻隊員となった兄に会いにいたり奮闘する日々を送ります。家族がばらばらになる心細さや配給でしか物が手に入らないわびしさも空腹も我慢する中、妹二人が黙って東京に帰ってしまいます。そして母と一緒に三人とも東京大空襲で亡くなってしまいます。何もかもが焼野原となった東京を、帰ってきた父と一緒に母や妹の消息を探します。そして自宅付近で半分以上溶けてぐにゃぐにゃになったガラスのうさぎを見つけるのです。その後父と二人で疎開先へ行く途中、突然父を失い、ひとりぼっちになった敏子さんは悲しみのどん底の中、たった一人で父の葬儀を行い……(続く)

私は何度か涙ぐみながら読まずにはいられませんでした。絶望の中奮い立つ敏子さんの思いが伝わってきて胸がしめつけられるようでした。戦争とはこんなにも非情で残酷なものなのかと改めて思いました。しかし、戦時中であっても、周りの人たちがとても親切で、親戚でもないのに色々と世話をしてくれたり、泊めてくれたり、父親の葬儀の準備をしてくれたり、人の心の温かさを感じることができました。

「戦後五十年以上が経ち、幸せなことに、日本はその間、戦争を経験することはありませんでした。戦争を放棄し平和を宣言する『平和憲法』を太平洋戦争で生き残った人々が大切に守ってきたからです。けれども最近では、その憲法も存続が危うい状況です。『平和憲法』ができたときの人々のこのころの原点を、今の若い世代の人たちに理解してもらいたい。」(※著者のあとがきより)

世界に目を向けると、現在も戦争が起こっています。しかしこの本が伝えるように戦争の恐ろしさや無念の中で犠牲となった大勢の人々のことを思わずにはいられません。平和の大切さを決して忘れてはいけないことも子供たちに伝えていきたいと固く心に誓いました。